ISSN 1880-585X

sendai-city chronicles communication paper.

せんだい 市史通信

第16号
仙台市博物館
市史編さん室

利府町の森郷児童公園に保存されているED91形電気機関車
もう1両のED91形は新幹線車両基地に保存されている

仙山線での交流電化営業運転開始のようす（昭和32年）

せんだい 今 昔
日本最初の交流電気機関車

仙台空港アクセス鉄道の完成が近づいていますが、この路線にJR仙山線を乗り入れるという話はあっても、JR仙石線の乗り入れについては全く話が出てきません。この問題には、じつはアクセス鉄道や東北本線、仙山線と、仙石線で用いている電気が違うという技術的問題がかかわっているのです。

一般に鉄道で用いる電気は直流と交流の二種類があります。鉄道の電化が進められた当初は、電圧が低く技術的に比較的容易な直流方式が用いられました。電化が早く行われた東海道線や大都市を走る電車の多くはこの直流方式なのです。仙台周辺では、大正14年（1925）開業の宮城電気鉄道（仙石線の前身）や仙台市電、秋保電鉄は全て直流方式を採用していました。

交流方式は２万ボルト以上の高圧電流を用いるため、技術的に難しい面がありますが、変電所が少なくて済み、小型のモーターでも大きな出力を得られるという利点があり、昭和30年代以降に行われた電化の多くで採用されました。もちろん、新幹線や仙台市営地下鉄も交流方式になっています。

じつは、日本で最初に交流方式の電化が行われた鉄道が仙山線なのです。仙山線は、長大な面白山トンネルがあるため、開業まもない昭和12年（1937）に作並－山寺間が直流方式で電化されていました。交流電化に際しては、既存の直流方式と接続した時に不具合が発生しないか確認する必要があったため、仙山線は試験線としてちょうど良い条件を備えていたのです。さらに、平地と山地が程よくミックスしており、機関車の性能を確認しやすいこと、列車の本数が少なく試験列車を運行しやすいこと、なども試験線として好都合だったのです。

日本最初の交流電化の試験は、昭和30年（1955）から陸前落合－熊ケ根間で開始され、交流方式の優秀性が実証されました。昭和32年（1957）には、交流電化区間は仙台－作並間に延長され、営業運転も始まりました。以後、交流方式が鉄道電化の主体になっていくのです。新幹線の技術的系譜の一つは仙山線から始まったのです。

この時、試験に使われた電気機関車ED45形（後にED91形と改称）が東北新幹線の車両基地がある利府町内に２両残されています。最初の交流電気機関車の保存地として、まさにふさわしいと言うことができるでしょう。

江戸時代のピクニック

ピクニック 【Picnic】野遊び/遠足/遊山(『広辞苑』第五版より)

江戸時代、庶民の娯楽のひとつは、弁当を携えて家族や気の合う仲間と寺社参拝もかねて遊びに出かけることでした。道中は茶屋でひとやすみ、頬に感じる風はさわやかで、遠い道のりも足取り軽くこころ晴れやかだったことでしょう。楽しみのかたちはいつの時代も変わらないものです。ではいったい、仙台城下の人びとはどこにでかけたのでしょうか。

定義如来(青葉区大倉)

芭蕉の辻から直線距離で 約21.0km

定義にある西方寺は山号を極楽山といい、古くから大願成就・縁結びの神として遠近からのあつい信仰を集めてきました。市内には定義への道しるべが多数あり、城下はもとより仙台領内各所から参拝に訪れていたことがわかります。北からは現在の泉区根白石を越えて大倉付近に出る道、南からは笹谷・二口・作並の街道から分かれた枝道を通って向かう道、仙台城下からは現在の新落合橋で作並街道と分かれて定義に向かう道(定義街道)をたどりました。道しるべを頼りに右へ左へ、遊山といえど徒歩の旅は楽ではなかったようです。定義に至る風景を詠みこんだ道中歌がいくつか残っていますが、人びとはこうした歌を口ずさんで長い道のりをまぎらわしたのでしょうか。

落合茶屋に腰をかけ　お酒一杯飲みながら
これこれ申しお姉さん　之より定義にいくらある
そこでお花の申すには　道の里数は四里と半
さあさ之より出かけましょ

"定義如来道中唄"

山の寺洞雲寺(泉区山の寺)

芭蕉の辻から直線距離で 約8.0km

仙台城下国分町の※版元手代佐吉が記した寺社参詣の紀行文である『参詣記』によると、「四月八日、山の寺へ出かける。天気は快晴で13人の一行は男女とも足の痛みなどさらさらなく、日が暮れてしまうのが惜しいくらい楽しい一日だった」とあります。道すがら、即興で句やうたをつくることもまた格別でした。歴史ある名刹として知られる洞雲寺は、奈良時代に建立され、南北朝時代に天台宗から曹洞宗に転じたと言われています。また山の寺とも称され、山形の立石寺(山寺)と並んで古くからの霊場として人びとの信仰を集めてきました。季節の風景もまた、訪れる人びとの目を楽しませたことでしょう。

※版元手代…本屋の奉公人

明治41年(1908)ころの山の寺洞雲寺(『行啓記念宮城郡写真帖』より)

国見峠より市街地を望む

国見コミュニティセンター向かいの道路脇にたたずむ疱瘡神

国見峠(青葉区国見)

芭蕉の辻から直線距離で 約4.5km

仙台城下の半子町から芋沢街道を西に進むと寿徳寺があります。そこには疱瘡除け祈願で有名な山の神の社があり、特に子どもは必ず拝まされました。さらにその先にある坂を上って標高230mの国見峠からの風景を一望し、坂を下り吉成の臨済院まで足を延ばしました。そして山路を楽しんだあと、再び半子町を通り、今も残る千田家の藤を一見して帰るのがお決まりのコースでした。藤の花が開花する初夏は臨済院の祭礼があり、最も人出が多かったようです。

『榴ケ岡花見図屏風(部分)』　個人蔵

榴ケ岡(宮城野区榴ケ岡)

芭蕉の辻から直線距離で 約2.2km

歌枕の地として知られた榴ケ岡は、城下からほど近いこともあって、一年を通じて人気の行楽地でした。『榴ケ岡花見図屏風』には、老若男女が花見をしつつ食べたり飲んだりする賑やかなようすが描かれています。このように人びとに親しまれるようになったきっかけは、寛文7年(1667)に天神社がこの地に移転したことと、元禄8年(1695)の釈迦堂建立でした。釈迦堂は四代藩主伊達綱村が生母浄眼院(三沢初子)の菩提を弔うために建てたもので、周囲の桜は綱村の意向で植樹されたものです。

施設探訪　ガイダンス施設　仙台城見聞館

仙台城の石垣といえば、青葉山の急な坂を歩きつつ見上げたり、あるいは車窓から覗いたりして、その姿を目にする方も多いかもしれません。今目にする石垣は、寛文8年(1668)の寛文地震被災後に改築されたものですが、その背後には伊達政宗が築城した1600年ころのもの、元和2年(1616)の地震後に作られたものの2世代の石垣が眠っていたのです。

仙台城見聞館外観

今年3月25日に仙台城本丸跡にオープンした「仙台城見聞館」は、仙台城の歴史や城と石垣の構造について映像や資料を展示しているガイダンス施設です。仙台城では平成10年(1998)から行われている発掘調査で、自然地形を利用した仙台城築城の土木技術の変遷が明らかになりました。見聞館では「石垣博物館」とも称されるほど豊富な情報を目にすることができます。また築城当時の石垣の一部が再現され、どのような技術で石垣を積み上げたのかが一目でわかるようになっています。なかでも石材の用い方も技術も違う3種類の石垣は、私たちを伊達政宗の時代にまでいざなってくれます。

景色を眺めながら、本丸へ登る武士に思いをはせて、石垣を見上げてみませんか。

館内のようす

開館時間 9:00~17:00(年中無休)　**入館料** 無料

交通案内 仙台駅前から車で約10分
東北自動車道仙台宮城ICから仙台西道路経由で15分
仙台駅西口バスプール9・11番乗り場より「仙台城跡方面行き」約25分、「仙台城跡南」下車
仙台城西口バスプール15・3番乗り場より「ぐーぷる仙台」で約20分、「仙台城跡」下車

所在地 〒980-0862　仙台市青葉区川内1-11(本丸跡・伊達政宗騎馬像西側)

問合せ先 仙台市教育委員会文化財課　TEL:022-214-8554　FAX:022-214-8399

資料みつけた

『仙台市史』のように歴史を扱ううえで、重要な材料となる資料。資料がなければ、時代をさかのぼる作業は困難になるでしょう。ここでは先人たちが残してくれた資料のひとつをご覧ください。

教皇庁日記（福岡市博物館蔵）

日ごろ備忘などのために日記をつけている方々も多いかと思いますが、これも月日が経つと重要な歴史資料となります。ここで紹介する『教皇庁日記』もまたそのような歴史資料の一つで、ローマ教皇庁において儀礼を司っていたパウロ・アラレオネの手に成るラテン語の日記です。このなかには、慶長遣欧使節のローマ滞在時（1615年10月～翌年1月）の記事が収められています。

使節一行のパレードの様子が描かれているローマ入市式では、支倉常長とその家臣はみな日本服を着し、観衆の敬礼に応えながら歩いていたと記されています。特に常長の服装は、同時期の別の資料によれば、鳥獣草花の刺繍を施した白地の日本服と記述されており、これはローマ・ボルゲーゼ家に伝来した支倉常長画像の服装を想起させます。

『教皇庁日記』（福岡市博物館蔵）の謁見式の記事の部分。ソテロ・支倉・政宗の名前がラテン語で記され、特に政宗については、「日本の奥州の王イダテマサムネ」と表現されている（朱の下線をつけて示した）。

またローマ教皇パウロ五世への謁見式では、政宗から託された親書が教皇に手渡され、書記官によって読み上げられるさまが記されています。この政宗の親書は、日本語文とラテン語文の両方があらかじめ用意され、蒔絵の小箱に入れられていたものでした。

このように『教皇庁日記』には、東西文化の交わる象徴的な場面が描かれており、慶長遣欧使節を架け橋とする東西文化の交流の様子を、いまに具体的に伝えてくれるじつに貴重な資料と言えるでしょう。

これまで『教皇庁日記』は、慶長遣欧使節の基本資料を集録する『大日本史料』第十二編之十二のなかでバチカン文書館所蔵の写本が使われ、よく知られてきましたが、じつはこれとは別系統の写本が福岡市博物館に所蔵されています。白地の表紙でしっかりと装丁され、1582年～1638年の記事が収められています。

福岡市博物館本を含めた最新の調査成果は『仙台市史 特別編8 慶長遣欧使節』（平成21年度刊行予定）に掲載される予定です。どうぞご期待下さい。

ローマ・ボルゲーゼ家に伝来した支倉常長画像（写真は当館所蔵の模写品）。白地に鹿や草花の模様を施した服装で描かれている。

おねがい　市史編さん室では、仙台の歴史にかかわる資料を探しています。よりよい仙台市史を作るためにはより多くの資料が必要です。皆さまのお宅に古い文書や写真などございましたら、ぜひ編さん室までお知らせください。　TEL:022-225-3074

仙台の歴史を完全収録　好評発売中

第22回配本
特別編7
城館
■オールカラー
■B5判　624頁
■定価6,000円

宮城県内主要書店、仙台市博物館2階売店でお求めになれます。
配送をご希望の方は、電話・FAXで㈱宮城県教科書供給所へお申し込みください。

発売元　㈱宮城県教科書供給所
〒983-0034
仙台市宮城野区扇町一丁目6-3
TEL:022-235-7181
FAX:022-235-7183

お問い合わせ先
仙台市博物館市史編さん室
〒980-0862
仙台市青葉区川内26番地
〈仙台城三の丸跡〉
TEL:022-225-3074

続刊予定
◎通史編／近代1～2・現代1～2
◎資料編／近代現代4・伊達政宗文書4・仙台藩の文学芸能
◎特別編／慶長遣欧使節

【通史編1】原始
【通史編2】古代中世
【通史編3】近世1
【通史編4】近世2
【通史編5】近世3
【資料編1】古代中世
【資料編2】近世1　藩政
【資料編3】近世2　城下町
【資料編4】近世3　村落
【資料編5】近代現代1　交通建設
【資料編6】近代現代2　産業経済
【資料編7】近代現代3　社会生活
【資料編10】伊達政宗文書1（完売）
【資料編11】伊達政宗文書2
【資料編12】伊達政宗文書3
【特別編1】自然
【特別編2】考古資料
【特別編3】美術工芸
【特別編4】市民生活
【特別編5】板碑
【特別編6】民俗

通史編　3,000円(本体2,858円)
資料編　4,000円(本体3,810円)
特別編　6,000円(本体5,715円)
※板碑のみ 5,000円(本体4,762円)
1冊ずつお求めになれます
【通史編1】原始は改訂版とセット販売となります

『通史編1　原始　旧石器時代』（改訂版）の刊行について　旧石器遺跡発掘ねつ造事件をうけて改訂版を刊行しました。ご購入いただいた元版を博物館の「市史改訂版」係まで送料着払いでお送りいただくか、博物館まで直接お持ちください。お届けいただいた元版に改訂版を添えてお返しいたします。詳しくは市史編さん室までお尋ねください。

せんだい市史通信 第16号
発行年月日／平成18年7月31日
編集・発行／仙台市博物館市史編さん室
〒980-0862　仙台市青葉区川内26番地〈仙台城三の丸跡〉
TEL／022-225-3074
URL http://www.city.sendai.jp/kyouiku/museum
R100
古紙パルプ配合率100%白色度85%再生紙を使用しています